

— Let's embark on a journey to discover our own “perspective on the Lotus Sutra”!

(“法華経観”を見つける旅に出よう!)

『妙法蓮華経 常不軽菩薩品第二十』 (本門・流通分)

○ 『又如来の滅度の後に、若し人あって妙法華経の乃至一偈・一句を聞いて一念も随喜せん

者には、我亦阿耨多羅三藐三菩提の記を與え授く』 (法師品 二〇二頁 終五行)

○ 『其の習學せざる者は、これを曉了すること能わじ』 (方便品 八十二頁 四行)

○ 「習学」の3つのステップ「聞解・思惟・修習」

○ 『若し聞解し思惟し修習することを得ば、必ず阿耨多羅三藐三菩提に近づくことを得たりと知れ』 (法師品 二〇九頁 三行)

○ 『十分の一でも実践できれば、また一つでも徹することができれば、立派な精進』

※表記 例：(P353・1行/P259・7行) ⇨ (『新釈・文庫版』頁数/『新釈・単行本』頁数)



<常不軽菩薩品のあらすじ>

【仏の『無量寿』を知って実践する功德と、法華経行者を罵る罪】—

【三・八頁 一行】 仏の滅後に仏の無量寿を知って『五種法師』を行ずる者は、「眼・耳・鼻・舌・身・意」の六根が清まることを釈尊が説かれ、得大勢(とないせい)菩薩に語られました。

「今こそ皆さんはしっかりと知るのです。 / (『法華経を持(たも)たん者を、若し悪口(あくぐち)・罵詈(めり)・誹謗(ひぼう)することあれば、大(おおい)なる罪報(つみほう)を獲(え)んこと前(まへ)に説く所の如し)』 もし、法華経を信受する男女の出家・在家の修行者たちに対して悪口を言ったり、罵ののひったり、誹謗(ひぼう)するような人は、その大罪(おおい)たいさいの報(むく)いを受けなければなりません。それは『警諭品』で『その人は阿鼻地獄(あびじく)へ落ちるだろう』と示した『十四謗法(じゅうしほうぼう)の罪』【一〇頁 終行~】のとおりです。それとは反対に、法華経を行ずるその人は、今、『法師功德品』【三・八頁 三行】『其(そ)の所得(しやくとく)の功德(くんとく)は、向(むか)ひに説く所の如く眼・耳・鼻・舌・身・意・清淨(しょうじやう)ならん』で説いた通り、眼・耳・鼻・舌・身・意の六根がこの上なく清まり、甚大な功德を得ることができます」

【過去世の威音王(いおんのう)如来の時代、常不軽という菩薩がいた】——

【三〇八頁 四行】「得大勢(とくたいせい)よ。よく知るので。法華經を實踐している在家・出家の修行者たちに対して罵倒(ばとう)し批判するならば、大いなる罪を受けることは先に話した通りです。そればかりか反対に法華經を實踐する者を讚歎(さんたん)するならば、先に説いたように、生まれながの眼・耳・鼻・舌・身・意の六根全体が淨(きよ)まり、神仏のような天眼通(てんげんつう)や天耳通(てんにつう)などの神力を得るようになるのです」

【三〇八頁 五行】「無量無辺(むりょうむへん)不可思議(ふかきぎ)阿僧祇劫(あそうぎこう)という計り知れない遠い昔のことです。威音王(いおんのう)如来という仏がおられました。その時代は離衰(りせい)、国は大成(たいじょう)と言ひ、仏は天人や人間、阿修羅(あしゅら)など鬼神たちに法を説かれていました。そして、《声聞(しょうもん)》の悟りを求める者に対しては『四諦の法門』を説いて生老病死の人生苦から解き放たせ、《辟支仏(びやくしぶつ)・縁覺(えんがく)》の悟りを求める者に対しては『十二因縁の法門』を説いて人生苦の原因と成り立ちについて明かし、そして《菩薩》の悟りを求める者に対しては『六波羅蜜の法門』を説いて、仏の智慧をきわめることを示されたのでした」

【三〇九頁 一行】「得大勢(とくたいせい)よ。この威音王(いおんのう)仏の寿命は、四十万億那由他恒河沙劫(なゆたごうがしゃこう)という計り知れない長い期間です。そして教えが正しく行われている『正法(しょうぼう)』の期間は、この地球を粉末(こな)にまつにした数の劫(じょう)に及び年数です。また教えが形の上だけでも伝えられる『像法(ぞうぼう)』の期間は、その四倍に及び年数です。そして、その威音王(いおんのう)仏は、衆生に大きな利益(りやく)を与えて、そののち滅度されたのでした」

【三〇九頁 四行】「その『正法』と『像法』の時代が終わり、仏法が見失われようとする時代が来ると、再び仏が現われましたが、その仏のお名前は同じく威音王(いおんのう)如来と呼ばれました。そうしたことがその後、二万億の仏が代々にわたって出現して繰り返されましたが、しかしそれらの仏の名はすべて最初と同じく威音王如来と呼ばれていました」

【三〇九頁 七行】「じつはその初代の威音王如来が滅度されたあと正法が滅して、教えが形だけしか伝わっていない『像法(ぞうぼう)』の時代で、かつ、法が忘れ去られようとする時、一人の出家菩薩がいました。名を『常不軽(じょうぶきやう)』としました」

【常不軽菩薩の信仰姿勢 — 『但行礼拝(たんぎょうらいはい)』】——

【三〇九頁 終四行】「得大勢菩薩よ。なぜ『常不軽』と名付けられたかと言いますと。この比丘は、相手が出家、在家を問わず、とにかく仏道修行をしている男女を目にすると、礼拝讚歎(らいはいさんたん)して『私はあなたを軽んじません(軽蔑(けいべつ)したり、侮辱(いぶじょく)や批判(ひはん)もしません)。なぜならあなたは菩薩道を行じて、いずれ仏となられるお方ですから…』と手を合わせ拜むのでした。しかもこの菩薩比丘は、／(『專(もっぱ)らに經典を讀誦せずして、但禮拜(ただらいはい)を行(ず)』 經典を讀誦することもなく、以上のような礼拝行をただひたすらに行うばかりでした」

【三〇〇頁 二行】「しかもはるか離れた場所にいるのを見つけると、わざわざそばにやって来て、同様に『私はあなたを軽んじません。なぜならあなたは菩薩道を行じて、いずれ仏となられるお方ですから…』と讚歎するのでした」

—— 【但行礼拝(たんぎょうらいはい)】

【三二〇頁 三行】「ところがその男女の出家・在家の修行者の中には、心が歪(ゆが)んで曲がり、濁(にご)っている者もいて、常不軽菩薩のそのような礼拝行に腹を立て、『この野郎。お前は一体どこから来た奴だ。オレ達を軽んじないなどと善人ぶったことを言いやがって、一体、何様のつもりだ。どこの馬の骨とも解らぬお前が、オレ達に『仏に成れる』のだとよく言うものだ。オレ達を馬鹿にするのか！ 口から出まかせの授記を言いやがって、偉そうなことを言うな！』と、常不軽菩薩に対して口を極めて罵(ののし)るのでした」

【三二〇頁 六行】「そして長い年月、常不軽菩薩は罵(ののし)られ通してでしたが、しかし、常不軽菩薩は最後まで怒り返すことはせず、そればかりか相変わらず人さえ見れば『私はあなたを軽んじません。なぜならあなたは菩薩道を行じて、いずれ仏となられるお方ですから…』と讃嘆し続けるのでした」

【三二〇頁 終四行】「常不軽菩薩の言葉の真意を理解できない者たちは、腹を立て、怒り、杖(つえ)や棒で殴(なぐ)りかかり、石や瓦(かわら)を投げつけたりしました。しかし常不軽菩薩比丘は、／(『避(さ)け走り遠く住して、猶(な)お高聲(こうしょう)に唱えて言わく』) すーっと逃げて行き、遠く離れた場所で、再び大きな声で『私はあなたを軽んじません。なぜならあなたは菩薩道を行じて、いずれ仏となられるお方ですから…』と言うのでした。このようなことをいつも繰り返していましたので、これら増上慢(ぞうじょうまん)の男女の出家・在家の修行者たちは、この菩薩比丘を『常不軽』と名付けたのでした」

【常不軽菩薩は『法華経』を説き続けた】——

【三二一頁 六行】(『是(こ)の菩薩復(また)千萬億の衆(しゆ)を化(け)して、阿耨多羅三藐三菩提(あのかたらさんみゃくさんぼだい)に住せしむ』)「さらに常不軽菩薩は、再び千万億という無数の人々を教化して、それらの人々が『仏の悟りを願う心』を不動のものとするまでに導いたのでした。そしてついに常不軽菩薩は寿命を尽き、亡くなったのでした」

【三二一頁 七行】「常不軽菩薩は／(『命終(みょうじゅう)の後(のち)、二千億の佛に値(あ)いたてまつることを得(う)い』) 亡くなったのち、以上の功德によってさらに二千億という無数の仏に次々と出会うことができました。その仏はみな『日月燈明(にちがつとみょう)仏』という同じお名前でした。それらの仏のみもとで常不軽菩薩は法華経を学び、／(『其(そ)の法の中に於て是(こ)の法華経を説く』) 多くの人々を教化し、法華経を説き広めたのでした。その功德によってさらに二千億の仏に会いたてまつることができたのでした。そうして出会えた二千億の仏はみな『雲自在燈王(うんじざいとうおう)仏』という同じお名前でした」

【常不軽菩薩が行なった精進の歩み・変遷(へんせん・何を行なったのか)】——

【三二〇頁 終二行】「常不軽菩薩は、ただ一つの①『仏性礼拝』の行だけを一生実践し続けたことにより、／(『偈(こ)三三頁 終二行/青経典三三頁 終二行』)『其(そ)の罪畢(つみお)え已(おわ)って』) ②常不軽菩薩がかつて前世に於いて犯した悪業(宿業)を滅(めつ)することができました」

【三二〇頁 終二行】『是(こ)の比丘終らんと欲する時に臨んで、虚空(こくう)の中に於て～法華経二十千萬億

の偽(げ)を聞いて』 ㊸ 「そして菩薩比丘が寿命を終えようとする今際(いま)の際(き)で、さきに威音王(いおんの)仏が説かれた法華經の真理に基づく二十千万億という無数の教えを、あたかも空中から響きわたる声を聞くように『自得(じとく)』したのであります」

【三二頁一行】『悉(ことごと)く能(よ)く受持して、～眼根清淨(げんこんしょうじょう)・耳・鼻・舌・身・意根清淨を得たり』 「そしてその教えを受持したことによって ㊹ 眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が清淨になったのでした」

【三二頁二行】『是(こ)の六根清淨を得已(おわ)って、更に壽命を増すこと二百萬億那由他歳(なゆたさい)、廣く人の爲に是(こ)の法華經を説く』 こうして六根が清まったために、 ㊺ 大きな神通力を得ることができ、壽命の増益を得て、二百萬億那由他歳(なゆたさい)という計り知れない期間延びました。

【三二頁三行】(『廣く人の爲に是(こ)の法華經を説く』) そして、常不輕菩薩は ㊻ 廣く人々のために法華經を説いたのでした」

※ ㊸ 仏性礼拝・但行礼拝 ㊹ 宿業・悪業を滅す ㊺ 法華經を悟る ㊻ 六根清淨 ㊼ 壽命の増益 ㊽ 法華經を広める

【常不輕菩薩を罵(のの)っていた者たちが改心。常不輕菩薩を讚歎する】——

【三二頁三行】「すると、悟ってもいないのに悟っているかのように傲慢(ごうまん)な心を持っていた増上慢(ぞうじょうまん)の出家・在家の男女の修行者たちや、常不輕菩薩を輕蔑(けいべつ)して『常不輕』とあだ名を付けた者たちは、 / (『其(そ)の大神通力・樂説辯力(ぎょうせつべんりき)・大善寂力(だいぜんじゃくりき)を得たるを見』) 常不輕菩薩が大神通力を得、しかもどのような人にも心から納得させるように法を説き《樂説弁力・ぎょうせつべんりき》、どんな圧力を受けても変わらず善行を實踐できる徳分《大善寂力・だいぜんじゃくりき》を具えた常不輕菩薩の姿を目(ま)の当たりにして、これまでとは違って、常不輕菩薩から教えを聞こうという心に徐々になって行きました。 / (『其(そ)の所説(しよせつ)を聞いて、皆信伏(しんぷく) 隨從(ずいじゅう)す』) そしてひと度、教えを聞くと、教えを深く信じ、傾倒(けいとう)し、従うようになりました」

【三二頁七行】「常不輕菩薩は千万億という多くの人々を教化し、仏の悟りへと導いたのでした。そして壽命を迎えた後、新たに生まれ変わり、二千億の仏のもとで順次めぐり逢い、精進したのでした。そのすべての仏は、みな『日月燈明(にちがつとうみょう)』という同じ名前の仏でした」

【常不輕菩薩は再び六根清淨を得て、そして、『法華經』を説き続けた】——

【三二頁終四行】「常不輕菩薩はこれら二千億の『雲自在燈王(うんざいとうおう)』のみもとで法華經を受持し、読誦して、 / (『諸(もろもろ)の四衆(ししゅう)の爲(ため)に此の經典を説くが故に』) 多くの出家・在家の男女の修行者に法華經を説き、そしてその功德によって眼・耳・鼻・舌・身・意の六根が清淨になったのであります。その結果、 / (『四衆(ししゅう)の中に於て法を説くに、心畏(こころおそ)るる所なかりき』) 人々に畏(おそ)れ憚(はか)ることなく法を説くことができるようになったのでした」

【三二頁終行】「得大勢(とくたいせい)よ。この常不輕菩薩はこのように無数の仏を供養・恭敬(くぎょう)・尊重(そんじゅう)・讚歎(さんたん)して、様々な善行を行ないました。そうして自身の人格向

上をつとめ、そののちまた千万億という仏に出会い、それぞれの仏から法華經を聞くことができたのです。／（『功德成就して當(まき)に作佛することを得たり』）そしてその法華經を説き続け、計り知れない功德を積み重ねていくことによって、ついに仏の悟りを得ることができたのでした」

【重大宣言①！ 常不輕菩薩は私(釈尊)の前身】

（『歴劫修行・りゃっこうしゅぎょう』の大切／永遠の寿命なるがゆえの修行）——

【三二頁 三行】「得大勢よ。どのように思いますか。このように生まれ変わり死に変わりして、数々の仏に仕え精進した常不輕菩薩は、ほかの誰でもありません。この私だったのです。もし私が前の世において法華經を受持することなく、読誦もせず、人に説くことがなければ、仏の悟りを得ることはできなかったでしょう。このように過去において数々の仏のみもとにおいて法華經を受持し、読誦し、／（『人の爲に説きしが故に、疾(と)く阿耨多羅三藐三菩提(あのかたらさんみゃくさんぼだい)を得たり』）人のために法を説いたからこそ、まわり道をすることなく真っ直ぐに仏の悟りへ達することができたのです」

—— 【歴劫修行・りゃっこうしゅぎょう】

【法華經を實踐する者(仏性礼拝をする者)を罵(ののし)る罪と、仏性礼拝による救い】

（『千劫の長きにわたり仏法僧に出会えず、その結果、怒りと苦しみの地獄の世界に住す）——

【三二頁 七行】／（『瞋恚(しんに)の意(こころ)を以て我を輕賤(きょうせん)せしが故に、二百億劫常に佛に値(あ)わず、法を聞かず、僧を見ず』）「得大勢(とたいせい)よ。その時の増上慢の出家・在家の修行者たちは『怒り』の心をもって私を輕んじ、罵(ののし)り、賤(いや)しめたために、その悪業によって二百億劫という計り知れない長い期間、仏(仏)に会うこともできず、仏の教え(法)も聞くことができず、仏の教えを信じずる人たちの仲間(僧)に入ることもできませんでした。／（『千劫阿鼻地獄(あびじごく)に於て大苦惱(だいくのう)を受く』）ですから千劫の長きにわたって人生を苦しみ、怒り・貪(むさぼ)り・争う地獄のような日々を送るのでした。しかし、その罪がようやく消えて、先の悪業が滅尽(めつじん)した時、人々を仏の悟りへと導こうと教化している常不輕菩薩に巡り会うことができたのです」

【重大宣言②！ 常不輕菩薩を罵(ののし)った者は、実は今、法華經を聴く者の一部の人たち】——

【三二頁 終三行】「得大勢(とたいせい)よ。あなたはどのように思いますか。その時の常不輕菩薩を輕んじ、賤(いや)しめた増上慢の出家・在家の修行者たちは、ほかでもありません。その人たちは、今まさに、この説法会にいる跋陀婆羅(ばたばら)ら500人の菩薩であり、師子月(しかつ)ら500人の比丘(男性の出家修行者)であり、尼思仏(にしぶつ)ら500人の優婆塞(うばそく・男性の在家修行者)たちなのです。しかしこの者たちは今では、仏の悟りを求める志が定まり、決して退転することがない素晴らしい求道(ぐどう)者になったのです」

【仏の滅度、法華經を迷わず實踐すること(五種法師の行の實踐)の大切さ】——

【三三頁 一行】「得大勢(とたいせい)よ。今こそしっかりと悟らなければなりません。この法華經は、諸々(もろもろ)の菩薩たちに大きな功德を与え、仏の悟りへと導く尊い教えです。／（『如來の

滅後に於て、常に是(こ)の經を受持し誦誦し解説(げせつ)し書寫(しょしゃ)すべし』ですから、私が入滅したのは、常にこの教えを受持し、誦誦し、人のために説くという『五種法師の行』に励まなければならぬのです」

【以上のことを、偈(げ)を以て再び説く】――

【(偈)三三頁 六行/經典 二十二頁 終二行】「得大勢(とくだいせい)よ。無量無辺不可思議阿僧祇劫(あそうぎこう)という計り知れない遠い昔のことです。威音王(いおんのう)如来という仏がおられました。(『神智無量にして一切を將導(しょうどう)したもう』) この仏は非常に優(すぐ)れた智慧をお持ちになり、この世の実相を見通されて、一切の者を正しく導かれていました」

【(偈)三三頁 七行/經典 二三頁 一行】『是(こ)佛の滅後法盡(ほうつ)きなんと欲せし時一(ひと)りの菩薩あり』、「その時、一人の菩薩がいました。『常不輕(じょうぶきやう)』と言いました。(『時に諸(もろもろ)の四衆(しじゆ)法に計著(けいちゃく)せり』) そのころの出家・在家の修行者たちは、教えを自分の都合に合わせて自分勝手に解釈し、それにとらわれていました。そして自分は眞の悟りを得ていないのに、悟ったかのように思い込んでいる(知ってる・やってる・わかってる) 憍慢(きやうまん)の者たちが世の中にはびこっていました」

【(偈)三三頁 終二行/經典 二三頁 終三行】『不輕菩薩能(よ)く之(これ)を忍受(にんじゆ)しき』「しかし、常不輕菩薩はその言葉を大きく包み込んで受け止め、怒り返すようなことはしませんでした」

【(偈)三三頁 終二行/經典 二三頁 終二行】『其(そ)の罪畢(つみお)え已(おわ)って』「そして以上の功德によって常不輕菩薩は、前世に於いて犯した悪業(宿業)を滅(めつ)することができました。

【(偈)三四頁 一行/經典 二四頁 一行】(『廣(ひろ)く是(こ)の經を説く』) そして、常不輕菩薩は広く人々のために法華經を説いたのでした」

【(偈)三四頁 一行/經典 二四頁 二行】『諸(もろもろ)の著法(じゃくほう)の衆皆菩薩の教化し成就して佛道に住せしむることを蒙(こうむ)る』「また、低い教えにとどまり執着していた人々は、常不輕菩薩のおかげで、結果的には人格を高めて行くことができ、そして仏の悟りを志すようになりました」

【(偈)三四頁 三行/經典 二四頁 四行】『是(こ)の經を説くが故に無量の福を得漸(じゆん)く功德を具(ぐ)して疾(と)く佛道を成ず』 さらに法を説き続け、こうした計り知れない功德を積み重ねていくことによって、ついに仏の悟りを得ることができたのでした」

【(偈)三四頁 五行/經典 二四頁 終二行】(『著法(じゃくほう)の者の不輕の汝當(なんじまさ)に作佛(さぶつ)べし』) という聞きしは是(こ)の因縁を以て無数の佛に値(あ)いたてまつる』) そしてこの者たちは、小法(しょうぼう・低い教え)にとらわれていたのですが、常不輕菩薩から『あなたは、必ず仏に成れる方です』と礼拝され、そのおかげでその後、無数の仏に出会うことができたのであります」

【(偈)三四頁 七行/經典 二五頁 三行】(『我前世に於て～斯(こ)の經の第一の法を聽受(ちやうじゆ)せしめ』) 「私は前世において、これらの人々に仏法の中で最高の法である法華經を説き聞かせ、しっかりと教えを受け止めるように教化してきました。／(『開示して人を教えて涅槃に住せしめ』) さらに自らの仏性を開かせ、眞理を示して、何事にもとらわれることのない大安心の境地へと導いてきました。／(『世世(せせ)に是(かく)の如き經典を受持しき』) そして私も生まれかわるごとに、常にこの法華經を受持して来たのでした」

【(偈)三二四頁 終四行/經典二五頁 終三行】『億億萬劫より不可議に至って時に乃(いま)し是(こ)の法華經を聞くことを得(i)』「億億万劫という、とても考え及ばない年月が経ち、時が熟してこそはじめて、法華經を聞くことができるのです。【(偈)三二四頁 終三行/經典二五頁 終行】『億億萬劫より不可議に至って諸佛世尊 時に是(こ)の經を説きたもう』そして同様に億億万劫という計り知れない年月を経て、仏ははじめて法華經を説くのです」

【(偈)三二四頁 終二行/經典二六頁 一行】「この法華經に巡り会うことは、本当に極めて稀(まれ)なことです。ですから世の修行者たちよ。私が滅度したのち、この尊い法華經を聞いて疑いや迷いを持ってはなりません。『この教えは果たして真実だろうか？【(偈)三二四頁 終行/經典二六頁 二行】『是(か)りの如き經を聞いて 疑惑を生ずることなかれ』この教えを素直に受け止めることができない』。などというような疑惑の心を持ってはなりません」

【(偈)三二四頁 終行/經典二六頁 三行】／『應當(まさ)に一心に 廣く此の經を説くべし 世世(せせ)に佛に値(あ)いたてまつりて 疾(と)く佛道を成(じょう)ぜん』一心にこの法華經を広めなければならないのです。そうすれば、その功德によって生まれ変わるごとに仏に会いたてまつることができて、まわり道をする事なく真っ直ぐに仏の悟りを得ることができるようになります」

「釈尊は仏の滅後における弟子たちの大切な心構えを説かれたのでした」



おし けっしょう ぎょうぼう かんそか 教えの結晶と行法の簡素化

(P20・8行/P12・終4行)

真実を日常の生活に実践するのに、誰にでも「簡単にできる行法」とはどんなものでしょうか。「自分の仏性を見詰め、人の仏性を拝むこと」がそれです。

自分の仏性を見詰めることを怠らなければ、たとえ煩惱はそのまま放置しておいても、煩惱そのものがひとりて「善のエネルギー」へ変わってしまうのです。

《息惛のひととき ①》

「自分の仏性を見詰めることを怠らなければ、たとえ煩惱はそのまま『放置』していても、煩惱はひとりて『善のエネルギー』に変わる」と庭野開祖は説きます。

— この「自分の仏性を見詰め」て、「煩惱を放置」するとは、どういう意味でしょうか？

ぶっしょう いとぐち 仏性のめざめの糸口

(P23・4行/P14・9行)

自分の「本質の善」を指摘してくれて、それに「正しい尊敬」をはらってくれたならば、誰でも自分をなおす気になりましょう。一時は、オベンチャラを言うなどと誤解することもありましょうが、心の底では決して悪い気はしません。それが自然な心情です。いつしか「オレもまんざらではないな」という気持ちになってくるものです。これが仏性のめざめの糸口になるのです。

《^{しゆい}思惟のひととき ②》

庭野開祖は「相手の『本質の善』を指摘し、『尊敬を払う』ならば、一時は、オベンチャラと誤解されても良い。いつしか『俺もまんざらではないな』という気持ちになってくれれば、それが『仏性のめざめの糸口』になる」と説きます。

— この、相手が「俺もまんざらではないな」という気持ちになることについて、あなたはどのように受け止めますか？ かみ締めてみましょう。

『^{ほけきょう たも もの も あつく めり ひほう}法華經を^{おおい}持た^{ざいほう}ん者^えを、^{おおい}若^{ざいほう}し^え悪口・罵詈・誹謗すること^えあらば、大なる罪報を獲ん』

(三一八頁 二行)

『^{もろもろ ほきつ ため おう ろくはらみつ ほう と}諸の菩薩の爲に～^{ほう と}應^{ほう と}ぜ^{ほう と}る六波羅蜜の法を説いて』 (三一八頁 終行)

なぜ^{ほきつ}菩薩には^{ろくはらみつ}六波羅蜜

(P39・終5行/P26・終4行)

菩薩にとって一番大切なのは、いうまでもなく「愛他・利他の精神」であり、その精神から発した実践行動～「布施」であります。

～ただ一つ、「布施」という徳目だけが、菩薩修行の「六波羅蜜」に限ってあり、しかも、一番真っ先におかれていることに、大きな特色があるわけです。 (P41・7行/P28・1行)

※ 「持戒」、「忍辱」、「精進」、「禅定」、「智慧」は、(自分に対しての行・自行)。

しかし、《布施》のみが「愛他・利他の行」

^{ぶつしょうらいはい}仏性^{せんこう}礼拝はすべてに^{せんこう}先行すべきもの

(P51・終3行/P36・5行)

『^{もっぱ}専らに^{きょうでん}經典を^{どくじゆ}讀誦せずして、^{ただらいはい}但禮拜を^{ぎょう}行^{ぎょう}ず』 (三二〇頁 一行)

【但行^{たんぎょうらいはい}禮拜】—

だからといって、読誦や説法が仏道修行にとって不要だと誤解してはいけません。これは、「人の仏性を礼拝することが仏道修行の根本であり、全てに先行するものだ」という意味です。

『^き避^{はし}け^{とお}走^{じゅう}り^な遠^{こうしょう}く^{とな}住^いして、猶^いお高^い聲^いに唱^いえて言^いわく』 (三二〇頁 終四行)

- ① 仏性を確信 — あらゆる人間が仏性を持っていることを確信。
↓
これをすべての考え方と行動の基礎とした。
- ② 仏性を礼拝 — 仏性の確信を、行動の上に明らかにした。礼拝行に徹する。
↓
- ③ 仏性の自覚へ導く — 『仏性礼拝』の実践によって、全ての人を、己の仏性に
↓
目覚めさせようと努力した。
- ④ 一行に努力を集中 — 『仏性礼拝』というただ一つの行いに努力を集中。
↓
- ⑤ 忍辱と柔軟 — どんな迫害にあっても耐え忍び、柔軟な態度で粘り強く所信を貫く。
↓
- ⑥ 真理を自得 — 無私の行いと仏性礼拝を積み重ねた結果、真理を悟得(自得)。
↓
(六根が浄まり、寿命増益) — 『仏性礼拝』の実践で六根が浄まり、寿命が延びた。
↓
(法華経を説き広める) — 『廣く人の爲に是の法華経を説かん』。

《思惟のひととき ③》

庭野開祖は、常不軽菩薩が六根を清浄にし、法華経を広く説くに至るまでにたどった5つの手順の第一段階に、「仏性を確信」したことだと解説しています。
— このこと(あらゆる人間が「仏性を確信」することが第一としたこと)を、あなたはどのように受け止めますか? かみ締めてみましょう。

ぶっしょう 仏性とはなにか

(P63・終4行/P45・終3行)

第一は、— 「仏の本性」という方向から見た場合。

不生不滅の「真如」そのものであり、あらゆるものを生かしてくださっている「久遠本仏」そのものを示します。

第二は、— 「仏に成りうる可能性」という方向から見た場合。

「至上の真理を悟った完全な人間になりうる可能性」。 すなわち「仏に成り得る可能性」

じひ 慈悲とは

(P68・3行/P48・終3行)

寛容の心をもって人に対すれば、その人の「可能性を伸ばしてあげたい」という気持ちが、ひとりどに生じてきます。そんな気持ちを「慈悲」というのです。

仏教で、対人関係における最大の美德としている「寛容」も「慈悲」も、つまりは「人の仏性を認める」にによって湧いてくるものであることを知らねばなりません。

さんいんぶっしょう 三因仏性

(P69・終5行/P49・終6行)

仏性には三因があると説かれています。すなわち「正因」と「了因」と「縁因」です。

「正因仏性・しょういんぶっしょう」— 全ての人が本来そなえている仏性。人間は本仏と一体。

「了因仏性・りょういんぶっしょう」— 教えを学び、法に照らし合わせることによって、本来そなえている仏性を知る智慧。

「縁因仏性・えんいんぶっしょう」— 「了因」を育て、「正因」を開発せしめる縁となるような「善行の功德」。つまり自行化他の行。常不軽菩薩の「礼拝行」など。

※ 『自らの仏性を悟り』⇒『他のすべての仏性を拝み』⇒『他者が仏性を自覚し、自他の仏性が輝く』

(「正因仏性」)

(「了因仏性・縁因仏性」)

(「仏性開顯を果たす。実現」)

じゅんけ ぎやくけ 順化と逆化 《「仏性」を自覚させる二つの道》

(P72・1行/P51・5行)

「順化・じゅんけ」— 仏性というものは常に外へ向かって顕現しようとする性質を持っています。その性質を利用して、その力にはずみを与え、引き出してあげる教化法。

「逆化・ぎやくけ」— 仏性の周りに取り巻いている「迷いの壁」があまりにも厚く、堅いので、やむをえず反省をうながす強い言葉や、厳しい破折(はしゃく)によって、外部からその厚い堅い壁を打ちたたかす教化法。

『人の爲に説きしが故に、疾く阿耨多羅三藐三菩提を得たり』 (三二頁 六行)

ひとつの行でも根気よく

(P81・終行/P58・1行)

常不軽菩薩が、ついに人々の教化に成功したのも・・・

① 「正しいと思うひとつのことを」⇒ (正しいことを)

② 「まごころをこめて」⇒ (真心こめて)

③ 「どのような事態が起こっても、くじけずに根気よくやり通す」⇒ (繰り返す)

という三つの要因がそろっていたからにほかならないのです。

※「正しいことを」、「真心こめて」、「繰り返す」。

《愚性のひととき ④》

『「正しいことを」、「真心こめて」、「繰り返す」ことが、常不軽菩薩を模範とする信仰姿勢だ』と庭野開祖は説きます。— では、私の信仰姿勢は如何でしょう？
何か、「真心こめて、繰り返していること」はありますか？ 振り返ってみましょう。

じゃっこうど 寂光土とは

(P95・7行/P67・5行)

寂光土の「寂(じゃく)」とは、「不変不動の安らかさ」という意味なのです。～ 常に変わりなく光明に満ち溢(あふ)れた世界を寂光土というのです。～ 万物を生かし、暖め、カづける、輝かしい光明がさんさんとふりそそぎ、～ お互いに美しく照らし合いながらはたらいているという「生々澆漚(せいせいはいわづ)」たる世界なのです。

じぎょう けた じゆんかん じょうぶつ いん 自行と化他の循環が成仏の因

(P103・3行/P73・6行)

常不軽菩薩は自行と化他行を替わりばんこに、数えきれないほど繰り返して行ったのです。その数限りのない功德の積み重ねによって、ついに仏になったのです。～

すなわち、学んでは行ない、行なっては学び、その受動・能動の両面から得るものを一つひとつ積み重ねつつ、確実に成道への道をたどって行ったのです。～

はじめはただ一つの菩薩行から入って行っても良い。それをまごころから行じ、繰り返す。そして自分が得た法を自分のものだけにせず、かならず人に法を説いて行く。～

この自行と化他行の循環によってに悟りを深め、ついに仏の境地に達したというきわめて現実的な経過を、我々に示しています。常不軽菩薩は、我々にとって他には得られぬ貴重なお手本なのです。

りゃっこうしゆぎょう 歴劫修行

(P107・終5行/P76・終4行)

この常不軽菩薩のように、ただ一生だけの修行ではなく、死んでは生まれ変わり、また死んでは生まれ変わりし、幾度も人生を歴(へ)ながら、真の悟りを得るために修行を続けていくことを意味します。
(※自らのいのちが無限・久遠であるからこそその修行)

ほとけ あ ほう きか そう み 仏に値わず法を聞かず僧を見ず

(P109・1行/P78・1行)

『曠恚(しんに)の意(こころ)を以て我を輕賤(きょうせん)せしが故に、二百億劫常に佛に値(あ)わず、法を聞かず、僧を見ず、千劫阿鼻地獄(あびじごく)に於て大苦惱を受く』(三二頁 七行)

仏教に説くところの「罰(ばつ)」というものの真の姿が、ここに明らかに示されています。～ とりもなおさず増上慢(そうじょうまん)の人たちは、自分が心の目を閉ざして仏を見ず、自ら耳をふさいで法を聞かず、自我の殻に閉じこもって仏法信者に近づいて行こうとしなかった・・・ということにほかなりません。～

そのために、内から湧いてくる煩惱を、教えや悟りによって浄めることもできず、また外からやって来る害悪に向かつては、ただ修羅の闘争を繰り返すばかりで、常に阿鼻地獄(あびごく)のような人生苦を舐(な)め続けなければならなかったのです。

これが、「罰(ばつ)」というものの原理です。

《^{しゆい}思惟のひととき ⑤》

常不輕菩薩品では、増上慢の人たちは長年にわたって「仏を見ず、法を聞かず、僧に近づかない」ということが説かれています。これは心が素直でなく、自分が正しいと心が頑(かたく)なになり、自分中心の心でいるからだとされます。
— では、私は「仏を見ようとせず、法を聞こうとせず、僧に近づこうとしない」ということはなかったか？ また、その時の自分の心・精神状態はどのような時であったか？
振り返ってみましょう。

さん ぼう
三 宝

(P114・1行/P81・5行)

深浅(しんせん) 三つの意義があるとされる仏・法・僧について

「住持三宝・じゆぢさんぼう」— 現実に即した、現象上の**三宝**。目に見える仏、仏像など(仏)、經典(法)、僧侶、法の実践者(僧)。

「別相三宝・べつそうさんぼう」— 歴史的に見た場合の**仏法僧**。人間釈尊(仏)、釈尊の説法(法)、釈尊教団の僧(僧)のように、本来一体であった三宝が特別な相(すがた)で現れたもの。

「一体三宝・いつたいさんぼう」— 一番深い意味の**三宝**。久遠実成の仏、真如(仏)、真如そのもの、根源の法(法)、真如を具現化した和合の姿(僧)。本質的な「仏法僧」で、もはや「仏法僧」が**一体**となっているために、「一体三宝」というのです。

ぎやくえん じゆんえん
逆縁・順縁

(P135・終2行/P96・終6行)

逆縁というものも大切であることを、暗にお説きになっておられるのです。～

敵対したり、攻撃したりするのは、とにもかくにも関心を持っているからこそするのです。たとえマイナスの関心であろうとも、関心を持っていることは、幸いとしなければなりません。なぜならば、それが説得の手がかりとなるからです。～

逆縁の人を決定的な敵とすることなく、その一段上に立って大きく包容し、いつかは自分の陣営に引き入れるという、度量と根気よさが、どんな場合でも必要でありましょう。それが仏道精神というものであり、常不輕菩薩がそのいいお手本であるわけです。

『是の法華經は大に諸の菩薩摩訶薩を饒益(にょうやく)して、能く阿耨多羅三藐三菩提に至らしむ～ 如來の滅後に於て、常に是の經を受持し誦誦し解説し書写すべし』 (三二三頁 二行)

すべての人間の**仏性**を礼拝し、顕現させるという根本精神を叩き込んだうえで、その精神に基づいて「**五種法師**」を行しなければならぬことを教えられたものです。

《^{しゆい}思惟のふいかえい まとめ》

今日の『常不輕菩薩品第二十』の学びを通して、何を学び取ったか？ (または、何を一番強く感じ、受け止めることができたか?) かみ締めてみましょう。

合 掌